

指導資料

鹿児島県総合教育センター
令和2年4月発行

国語 第150号

対象
校種

高等学校，中学校
特別支援学校，義務教育学校



「国語を学ぶことは楽しい！」
—生徒が「主体的に」取り組むための2つのポイントを通して—

よい授業とは、どのような授業だろうか。教師なら誰もが目を爛々と輝かせる生徒と授業を展開していきたいと願うだろう。今、講義調の伝達型授業からの脱却が求められている。ここでは、生徒が「国語を学ぶことは楽しい！」と「主体的に」取り組める高等学校国語科の授業の具体的な手立てについて、授業実践の例を挙げながら提案する。

1 高等学校における国語科の授業の実態

「羅生門」，「水の東西」，「山月記」，「こころ」等国語科の授業で使用する教科書には定番の教材がある。親子の共通の話題になり得るほど読み継がれてきた数々の作品。授業者は、毎年教材研究を繰り返し、より深い知識を身に付けていく。授業者は、自らが学んだこと、考えたことを次々に生徒に伝え、作品の面白さを伝えようとする。しかし、それに反して、授業中の生徒の反応は乏しくなる。

この学習は
何か役に立つ
のかな？



先生の言葉
が頭に入って
こないな…

あれれ？
生徒の反応がよくないな…。
この文章、面白いんだけどな…



「あれ？数年前と比べて生徒の反応が悪いな…。」「現代の生徒にとって教材が古くなってきているのかな…。」授業者が苦悩する一方で、「この文章のどこが面白いのだろう？」「そもそも国語を学んで役立つのかな…。」こんな生徒の声も教室の中から聞こえてくる。

高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。

(平成28年12月中央教育審議会答申より)

高等学校で行われている多くの国語科の授業を考えると、平成28年12月の中央教育審議会答申にある「教材への依存度が高い」という指摘は否めない。現に卒業した生徒に聞いてみると、教材名を覚えてはいても、教材を通してどんなことを考え、学んだかということはなかなか記憶にないのが実態である。

高校国語の授業の課題

「教材を」教える授業



授業者の一方的な伝達型授業

2 国語科の授業改善の視点



生徒に考えることの楽しさ、国語を学ぶことの奥深さを伝えられる授業を行うには、授業者が、常に授業改善の視点をもつことが必要である。たとえ毎年扱う教材でも、生徒の実態が違えば実態に応じて入念な授業計画が必要である。生徒が「主体的に」取り組める国語科の授業を計画する際、特に気を付けたいのが次の2点である。

生徒が主体的に国語科の授業に取り組むための2つのポイント

①学習課題設定の工夫

授業者が1単位時間、または単元を通して「何ができるようになるか」という育成する資質・能力を把握し、生徒に見通しを立てさせる。

②言語活動設定の工夫

前単元・前時とのつながりをもたせ、「この活動が〇〇の解決につながるんだ」、「この活動をやってみよう」という必要性をもたせる。



今何を学んでいるのかを常に生徒に把握させましょう。

3 主体性と「内発的動機付け」の関連性

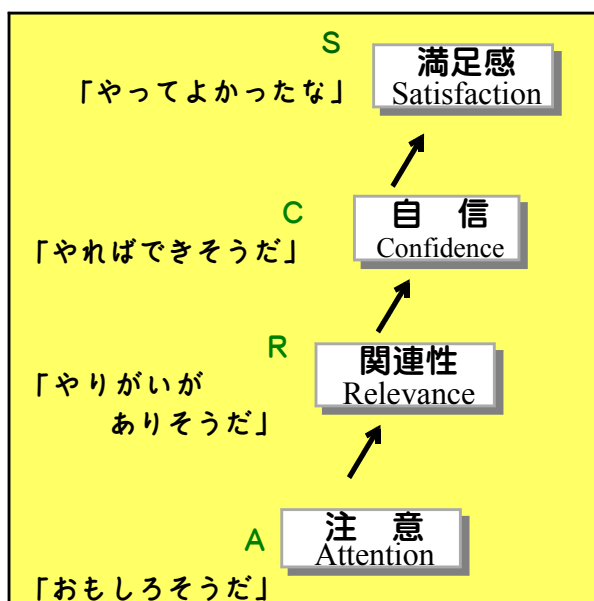
ARCSモデルの4要因

(鈴木克明1995「放送利用からの授業デザイナー入門より」)

生徒が授業に主体的に取り組むためには、「動機付け」が必要である。「外発的動機付け」が学習効果に対する賞罰や報酬等の外因によって引き出されるのに対し、「内発的動機付け」は学習内容や学習活動そのものから引き出される。毎時間の国語科の授業に生徒が主体的に取り組むためには、この「内発的動機付け」が鍵を握る。

「内発的動機付け」を伴った学習を実現するためにケラー(2010)は、動機付けに関する膨大な心理学研究や実践知を統合し、「ARCSモデル」として右のように四つの段階に整理した。

例えば、導入部は、「注意(Attention)」の視点で生徒が興味・関心をもちそうな学習課題を設定し、「関連性(Relevance)」の視点で言語活動を通して解決の見通しをもたせ、「自信(Confidence)」の視点で他者と考えを共有し、「満足感(Satisfaction)」の視点で振り返りをさせる。1単位時間または単元の計画を練る際に、生徒がこのような四つの段階を踏めるかどうか検討してほしい。



やりがい(R)を感じて取り組めたようだな…。



この視点なら今の生徒たちが「おもしろそうだ」(A)と興味をもちそう。さらにあの教材と比較させると「やればできそうだ」(C)という視点につながるな…。

4 授業実践例から

授業実践A (松陽高等学校 川畑美沙教諭の授業実践を基に作成)

二つのポイントとARCSモデル
を基に見てみよう!



【科目】古典B 【実施時期】2年2学期

【単元名】時代を超えた日記について考える

【教材名】日記『更級日記』「あこがれ」(精選古典B改訂版 大修館書店)

【育成を目指す言語能力】古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。(古典B 指導事項ウ)

【取り上げる言語活動】古典に表れた人間の生き方や考え方などについて、文章中の表現を根拠に話し合い、級友と考えを共有すること。(古典B 言語活動例ウ)

【単元の実際】

時数	主な学習内容
導入 (2)	- 各自の過去、現在の「あこがれ」について自分史を書いて発表し、全体で共有する。 - 本文を通読する。
展開 (4)	- 第一段落の文法事項、敬語等の確認、現代語訳をする。 - 作者の物語への強い憧れを、本文の表現から読み取る。 - 第二段落の文法事項、敬語等の確認、現代語訳をする。 - 薬師仏への惜別の情を読み取る。 - 同時代の日記文学を調べ、各班で新聞形式にまとめ、その特徴を全体で共有する。
終末 (2)	『更級日記』の冒頭「あこがれ」が作品全体の中でどのような位置を占めるか、本文中の表現を基に、作者の心情を考察する。 - 前時の振り返りと単元の学習のまとめを行う。

注意
Attention

A

「おもしろそうだ」

②言語活動設定の工夫
つながりを意識させる

単元の導入部で行った言語活動での成果物を単元の終末部で再び活用することで生徒は単元をつながり意識し、導入で行われた言語活動の必要性の実感を強めることができた。また、導入部と終末部での自分の考えの変容に気付くこともできた。

①学習課題設定の工夫

学習課題を自分事として捉えさせる

自信
Confidence

C

「やれできそう」

この学習課題は「更級日記の冒頭はなぜ『あこがれ』から始まったのか、自分の作品や他者との交流を通して考えよう」という単元の核となるものである。生徒は、自分が書いた自分史の冒頭と『更級日記』の「あこがれ」を比較することで作者の心情を理解し、文章を読み深めることができた。

現代語訳や内容の確認が単元の学習の中心になってしまいがちな古典Bの授業で、平安時代と現代の「日記」について、自分たちの書いたものと比較することでものの考え方、感じ方を深めていくことができた。このように単元の学習計画を立て見通しを確実にもたせておくことが、生徒が主体的に取り組む上で、いかに重要であるかということも再確認できる。

授業実践B (薩摩中央高等学校 道永智子教諭の授業実践を基に作成)

【科目】現代文B 【実施時期】3年2学期

【単元名】小説を主体的に読むーワールドカフェ方式を取り入れてー

【教材名】「骰子(さいころ)の七の目」(高等学校改訂版 現代文B 第一学習社)

【育成を目指す言語能力】文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確に捉え、表現を味わおうとしている。(現代文B 指導事項イ)

【取り上げる言語活動】文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。(現代文B 言語活動例ア)



【単元の実際】 は生徒の反応

時数	主な学習内容	
導入 (2)	1 単元の学習課題を理解し、学習の見通しをもつ。	
	2 分からなかった部分・疑問に思った部分を挙げ、自分が解決したい「自分の問い」を立てる。	
展開	3 「自分の問い」の解決に取り組む。	 - どの部分に注目して読めば、「自分の問い」が解決できるか考えながら読んでみよう。 - 根拠に基づいた自分の考えを導き出すために、付箋を使い、考えを深めよう。 ※思考ツールを用いて、付箋を貼り替えながら考える
	4 作成した思考ツールを用いて、ワールドカフェを通して交流を行う。	 ワールドカフェとは… 気軽な雰囲気の中で、参加者同士が話し合う対話のスタイル
終末 (2)	5 全員の「自分の問い」とその考えを参考にしながら、もう一度作品を読み、自分の導き出した考えは間違っていないかを再考し、主題は何かを考える。	満足感 Satisfaction
	- この作品の主題は、選ばないという選択肢を踏まえた上でそれぞれが広い視野で選択をすべきだと考える。私が考えた主題のように、もっと視野を広げ、様々な選択肢を増やせるようになりたい。 - 私は今まで、自分の意思ではなく、友達で行動することが多かった。これからは、自分で考え決定し、自分の考えを持つことが大切だと思った。	考查問題として出題する S 「やってよかったな」

①学習課題設定の工夫

「自分の問い」を設定させる

関連性
Relevance

R

「やりがいがありそうだ」

「小説を主体的に読ませてみたい」と考えた授業者は、生徒一人一人に「自分の問い」を立てさせた。時間をかけて吟味しながら「自分の問い」を設定させることで、この単元で自分が取り組むべきことを生徒は自覚して授業に臨むことができた。

②言語活動設定の工夫

全員が発表し、自分で情報を選択させる

自信
Confidence

C

「やれできそうだ」

「全員が発表する」、「自分の問いを解決するために必要な情報を選んで発表を聞きに行く」ために、ワールドカフェを設定することで意欲的に言語活動に取り組めた。また、思考ツールの活用により自分の考えを可視化させることで他者との考えの共有が深まった。

5 生徒の声をヒントに

「国語の授業は、感覚的で曖昧。」こんなことをつぶやき、国語の授業を楽しいと思えない生徒が教室の中にいる。生徒の声には、指導者として時に心落ち込むが、その声には大切な授業改善のヒントが潜んでいる。自分が学び、面白いと思ったことを生徒にも考えさせるには、動機付けが必要である。特に授業の導入には動機付けの工夫に留意して授業をデザインしたい。私たちの授業改善の視点が、これからの社会を切り拓いていく力につながると確信して追究し続けてほしい。

—引用・参考文献—

- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』平成22年6月
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 国語編』平成30年7月
- 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）』平成28年12月21日
- 稲垣忠 編著『教育の方法と技術』平成31年3月 北大路書房

（教科教育研修課 梅本かおり）